

多磨墓地の空間的特徴に関する研究

Study on spatial characteristic of Tama Cemetery

学籍番号 47-136755

氏名 出屋敷 嘉亮 (Deyashiki, Yoshiaki)

指導教員 大野 秀敏 教授

■ 1. 研究の目的と修景墓地の分類

現代、日本の都市郊外で墓地形態としてみられる西洋的造園が施された墓地は、旧来の寺檀墓地や地域共同墓地とは空間像が大きく異なっている。本論文では日本で初めて西洋的造園が施された墓地である多磨墓地を対象とし、文献調査と実地調査によって、近代において墓地が西洋的造園と結びついた経緯を整理し、多磨墓地の設計上の特徴を明らかにすることを目的とする。

西洋的造園が施された墓地に関する文献において、造園技法や様態による呼称に定義は見られない。論考を進めるにあたり、西洋的造園が施された墓地全般を「修景墓地」と定義し、軸線園路の有無とそれ以外の主要園路の形状により修景墓地を4種類に分類する(表1)。



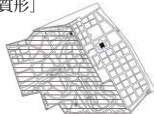

[ヴィスタ形]: 軸線あり・整形園路

[焦点形]: 軸線あり・曲線園路

[均質形]: 軸線なし・整形園路

[風景形]: 軸線なし・曲線園路

表1 修景墓地の分類 (用いた平面図は1より)

	整形園路	曲線園路
軸線あり	[ヴィスタ形]  例: ミュンヘン東墓地	[焦点形]  例: ケルン北墓地
軸線なし	[均質形]  例: ベール・ラシエズ墓地 (ハッチ部は除く)	[風景形]  例: サイプレス・ローン墓地

■ 2. 西洋における修景墓地の発生

修景墓地は日本独自の形態ではなく、発祥は欧米である。本章では欧米で修景墓地が発生した要因について整理し、死生観と造園技法の関連を明らかにする。

欧米において広くみられるキリスト教会墓地は中世から近世にかけて広まったが、18世紀の中頃以降は大衆の支持を徐々に失っていく。この動向とは反対に、大衆に受け入れられたものが都市郊外に営造された修景墓地であった。

欧米で修景墓地が営造されるに至った要因として、

- < 1. 慢性的な墓地不足 >
- < 2. 都市の開発圧力 >
- < 3. 教会墓地の腐敗臭気と衛生問題 >
- < 4. 「死」への行政の介入 >
- < 5. 墓に対する意味付けの変化 >

が挙げられる。1. から 3. の問題は産業革命以後、拡大の途上にあつた都市における急激な人口増加に起因する教会墓地の問題点である。< 1. 慢性的な墓地不足 > は人口増加に依る。当時は大衆の移動手段が徒歩に限られており市街地ではすでに< 2. 都市の開発圧力 >が高まっていた。このため、市街地の教会墓地は新たに用地を取得するのが困難な状況で、遺体を高密度に埋葬し、埋葬された遺体の掘返しの頻度を上げることで対応を強いられた。この結果、高密度な埋葬、短期間での掘返しがおこなわれ< 3. 教会墓地の腐敗

臭気と衛生問題>が生じた。このことから<4.「死」への行政の介入>が強まり、公衆衛生や土地利用という観点から墓地が郊外化するとともに脱宗教化が進行した。この流れと平行して大衆の<5.墓に対する意味付けの変化>が起こっていた。近代に入り、墓が「死者を宗教に預ける場」から「愛した故人との再会をする場」へと変容したのである。墓地が宗教的超越性という観点からではなく即物的に環境として捉えられるようになったことから、墓地は良好な環境を求められることとなった。

修景墓地は、理想の空間像としてロマン的風景や田園美を表現することで大衆の支持を得ていった。用いられた園路形状と造園技法は各国で異なり、フランスではヴィスタ形が用いられ墓標をロマン的に装飾する効果を意図し植栽を扱った。これに対して、アメリカでは風景形が用いられ、都市民の理想とされていた田園風景を表現したことで広く流行した。アメリカ風景形墓地は設計の当初から生者のための行楽地として企図されていたことが特筆される。後により開放性を求めて芝生を用いたものが広まった。イギリス、ドイツでは最初期に風景形が導入されたが、死者のための厳かな場として秩序立った園路が求められた結果、広まったのはヴィスタ形であった。イギリスでは造園技法への偏重が否定的に捉えられたため、植栽は他国に比べ少ない。ドイツでは死者を埋葬する上で理想とされた環境が森林であったことから、ヴィスタ形と植栽の組み合わせが広まった。1900年頃には森林の植生を活かし、焦点形や風景形の墓地を設けた事例もみられたが、土地利用効率と整備性の悪さから風景形は1920年初頭以降は営造されていない。

■ 3. 修景墓地以前の日本の墓地

本章では日本で修景墓地が発生するに至った要因について整理する。

江戸末期、江戸市中の寺檀墓地は市街地に位置していたため、既に高密度に埋葬がおこなわれていた。当時から流入人口が多かったことから、墓地はすでに狭隘化が進行していたようである。

明治に入って以降、墓地の供給・管理は寺から政府の手に移った。明治政府は青山墓地など9箇所を1874年に宗派を限定しない共葬墓地として開設することとなった。当初は都市周縁部に位置していたこれらの共葬墓地の周辺は、年代が下るにつれ市街化が著しくなり、土地利用上問題視された。また衛生の面においても、1878年のコレラ大流行を受けて墓地の位置や境界が定められるなど、公衆衛生の観点も重要性を増していた。1911年には青山墓地移転に関する建議において、「衛生上、経済上、体面上」²⁾の各観点から市街地に存在する大規模墓地の問題が指摘されている。墓地不足も早急に解決べき問題となっていたため郊外に新設墓地が計画され、1923年に日本初の修景墓地として多磨墓地が開設されることとなった。

■ 4. 日本における修景墓地

本章では、修景墓地新設の際の要件、設計者井下清の設計思想、実際の設計について、史料と実地を調査し整理した。

4-1 修景墓地新設を促した諸要因

前章で挙げたとおり、土地利用、公衆衛生、墓地需要への対応という観点で墓地新設は急務であった。墓地新設が必要とされていた都市計画的背景は欧米と同一といえる。一方で西洋的造園に関しては、井下が言説の中で「この新型墓地に対し、毀誉褒貶相半ばすると言うよりは、当局の非常識に呆れたという風な観方が

相当あつた。」³⁾と回顧していることから、日本では大衆の墓地観には著しい変化はなかったことがうかがえ、大衆の墓地観が変化したことへの対応として修景墓地が登場した欧米とは大衆の態度が異なっていることがわかる。したがって、墓地新設は必要事項であったものの新設墓地が修景墓地であることは社会的な要請ではなかったと考えられ、欧米の修景墓地に触発されて修景墓地としての開設が決定されたものと思われる。

4-2 設計者井下清の設計思想

井下清は当時の東京市公園課長であり、多磨墓地の事前研究から設計まで関わった人物である。井下は旧来の墓地について、都市景観の観点から問題があると述べている⁴⁾ことから、墓地を宗教的超越性ではなく即物的環境として捉えていることがわかる。設計については、欧米の修景墓地を参考とする一方で、家族制度や日本の習俗を尊重しながら設計をしたと述べている⁵⁾。多磨墓地設計時の参考にしたとされる欧米の墓地については、修景墓地の中でも特にドイツ公園形式、森林形式など植栽の豊かなものを評価している⁶⁾一方で、墓地が一般公園のように行楽地化することには否定的⁷⁾であった。日本人の自然観について「自然人である我々は美しい樹林、美しい花、朗らかな芝草なくて(中略)物足らぬ寂しさを感じる。」⁸⁾と述べ、墓域を修景する必要性を述べている。また、墓域を修景することを家の庭と同じであるとも述べている⁹⁾ことから、墓域の理想像に住居観を重ね合わせていることがわかる。身分や家格に対しては否定的な発言¹⁰⁾がみられ、「階級的観念を殆ど感ぜしめぬ地割をした」¹¹⁾との発言からも、設計で公平性を重視していたと読み取れる。



図2 現況の区画と園路計画

4-3 多磨墓地の設計

文献と実地の調査によって、園路計画と区画割について以下の特徴を見出した。

[1] 園路は整形園路、軸線園路、周回園路、放射園路の4種があり、

- 軸線園路の延長部は整形園路と同一意匠
- 周回園路の直線部は整形園路と等間隔
- 放射園路は整形園路の交点を貫く

以上の特徴から、軸線、周回、放射の各園路は整形園路のグリッドパターンを基準として配置されていると考えられる。



図3 1917 測図 / 1919.12.28 発行 1/25,000 地形図『田無』



図4 上記と同区域の現況地形図『国土地理院電子地形図 25000』

[2] <参道一門一内部軸線>が直線状に並び、参道から墓地へ向かうと門に正対する。南参道は開園に合わせて既設道路が転用され参道となった。敷地南辺中央付近にも転用可能な既設道路が存在していたが、曲線部分と分岐が多いその道路を選ばず、直線的で他の道路と直交する現行の参道を選択している。(図3,4)

[3] 一区画は大小異なる面積の墓域により構成されており、名誉霊域を除いて各区画間に序列はない。

■ 5. 考察

【墓地が西洋の造園と結びついた経緯】

欧米では近代以降に教会墓地が抱えた問題点により、墓地が宗教的超越性をもった場としてではなく、衛生・景観・土地計画など都市計画的観点から即物的環境として捉えられたため、理想とされる墓地の空間像に良好な環境が加わったと考えられる。井下もまた、墓地を即物的環境として捉えていた。理想とする墓地環境と住居観とを重ね合わせ、植栽の存在と死者を祀る荘厳さを理想の環境として挙げていた。井下がドイツ・ヴィスタ形を参考としたのは、欧化の影響に加え、自然観が近く、死者のための秩序だった修景を旨としていたためと考えられる。

【多磨墓地の設計上の特徴】

領域内の中心性により園路と各区画が

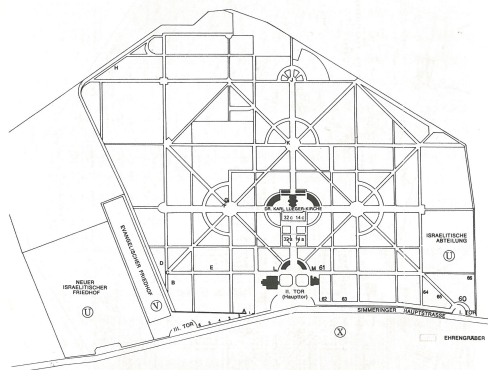


図5 ウィーン中央墓地 『西洋墓地史II』佐藤昌、pp74

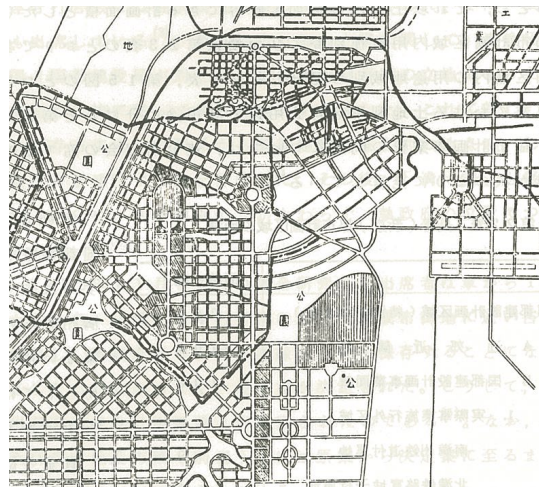


図6 満州国都建設計画 『植民地満州の都市計画』越沢明、1978より

秩序立てられるドイツ・ヴィスタ形の園路計画(図5)と比較すると、軸線園路が園地の端にあり全体を規定しないこと、放射園路が園地の周縁である門を強調するように配されていることは多磨墓地の特徴である。領域の中心に支配的な軸線が存在せず、領域の周縁に計画上の中心性が存在する形態は、同時期の都市計画にもみられる特徴である(図6)。

日本の都市計画手法との類似点から、多磨墓地における門が求心的な園路計画は、動線の《収斂点・拡散元としての中心性》によるものと考えられる。このとき門は求心的な端として《軸線の指向性》をもつ。軸線は全体を統御せず《軸線同士は無関係》に存在するため、各軸線近傍の限定された空間に影響を与えるにとどまり、墓域の各区画はグリッドの秩序に従う。軸線同士の仮想交点は無関係に存在する軸線の「他端」の交点であるがゆえに焦点性を見出されず、軸線の限定的な影響範囲ゆえ全園は序列が弱く公平性の高い空間となったものと考えられる。

- 1) 『日本における公園墓地の実現をめぐる井下清の模索』大和田勝文、2014
- 2) 青山墓地移転に関する建議／東京市議会／1911.5.3
- 3) 「庭園式墓地の再検討」『公園緑地』pp450-451、井下清(1937)
- 4)-6),8)-11) 『建墓の研究』井下清(1942) 雄山閣
- 4)pp57, 5)pp59, 6)pp53-54, 8)pp175, 9)pp176, 10)pp115, 11)pp63
- 7) 「都市の墓地問題」『都市問題』4巻5号1927.5pp924